

MUSIRO DA

# 席田遺跡群 7

— 大谷遺跡第4次調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第357集

1994

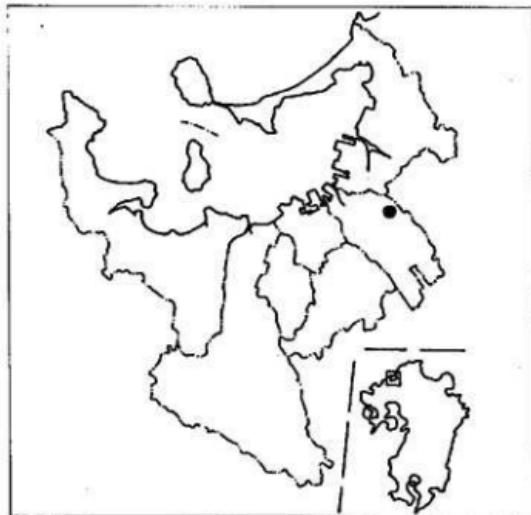
福岡市教育委員会

MUSIRO DA

# 席田遺跡群 7

—大谷遺跡第4次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第357集



1994

福岡市教育委員会

## 序 文

本市は古来よりアジア太平洋と深いかかわりを持ち、「海に開かれた活力あるアジアの拠点都市」として「アジア太平洋都市」宣言を採択しアジア太平洋における真に人間的な交流と協調の場・人の都福岡を目指し街づくりに取り組んでいるところであります。1995年この一環として「ユニバーシアード福岡大会」を開催する運びとなり、現在これに向か市内の施設・道路の整備等を進めております。

1972年米軍より本市に返還され、都市整備局によって市民の健康と憩いの場として整備を進められた「東平尾総合運動公園」も福岡大会の会場として更に整備を進め、今回球技場を拡充する事となりました。

工事計画地内での遺跡の存在が明らかとなり、本市では文化財保護の立場からこれら失われていく遺跡の記録保存として発掘調査を行なっており、公園内の調査は今回で12次を数えるに至りました。

調査の結果、弥生時代の物見台的な遺構の他、古墳を検出し、席田遺跡群内での弥生時代後期の整備された集落景観を一歩明確にする事ができ、また鋳型模造品・多数の鉄器等貴重な資料を多く検出する事ができました。

調査に際しご協力をいただいた関係者各位、また地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝する次第であります。

本書が埋蔵文化財に対する理解の一助となるとともに学術研究においても活用していただければ幸いであります。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

## 例　　言

1. 本書は博多区東平尾に所在する「東平尾総合運動公園」内の遺跡の総称である「席田遺跡群」第12次・群内大谷遺跡第4次の発掘調査報告書である。
2. 調査区内のグリッド割りは公園建設の仮座標にのせ10m間隔で設置し、グリッドの呼称は西交点とした。
3. 本書で用いる方位は磁北であり、真北との偏差は $6^{\circ}21'$ である。
4. 遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物→SB・土壙→SK・溝→SD・貯蔵穴→SU・土壙墓→SR・甕棺→ST・柱穴→SPとした。
5. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦・上方高弘による。
6. 本書に使用した遺物実測図は加藤による。
7. 本書に使用した写真は加藤・平川敬治による。
8. 本書に使用した図面の整図は加藤・木村厚子・国武真理子による。
9. 本書の執筆・編集は加藤が行なった。
10. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

## 本文目次

I.はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
II. 調査区の立地と環境.....	2
III. 調査の記録.....	5
1. 調査の概要.....	5
2. 1区の調査.....	6
(1). 大谷1号墳.....	7
(2). 溝.....	9
(3). 貯蔵穴.....	13
(4). 墨立柱遺物.....	14
(5). 土壇.....	15
(6). 石蓋土壤幕 SR-10.....	16
(7). 鮫棺墓 ST-13.....	19
3. 2区の調査.....	20
(1). 上面の調査.....	21
(2). 下面の調査.....	23
IV. 小結.....	32

## 挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000) .....	3	Fig. 10 1号墳石室 (南西から) .....	7
Fig. 2 調査区位置図 (1/6,000) .....	4	Fig. 11 1号墳石室・土層断面図 (1/60) .....	8
Fig. 3 周辺調査区遺構図 (1/1,000) .....	5	Fig. 12 1号墳出土鉄鎌 (1/3) .....	9
Fig. 4 第1区全景 (南東から) .....	5	Fig. 13 SD-02全景 (北西から) .....	9
Fig. 5 第1区全景 (北西から) .....	5	Fig. 14 SD-02土層図 (1/100) .....	9
Fig. 6 第1区遠景 (北東から) .....	5	Fig. 15 SD-02 (北東から) .....	10
Fig. 7 第1区遺構全体図 (1/250) .....	6	Fig. 16 SD-02東側縦断上層 (北から) .....	10
Fig. 8 1号墳全景 (北西から) .....	7	Fig. 17 SD-02隣接部土層断面 (北西から) .....	10
Fig. 9 1号墳石室 (北東から) .....	7	Fig. 18 脚付鉢-12 .....	10

Fig. 19 SD-02出土遺物 (1/4) .....	11	Fig. 43 第2区上面全景 (西から) .....	20
Fig. 20 SU-11・12 (1/60) .....	12	Fig. 44 第2区上面全景 (南から) .....	20
Fig. 21 SU-11土層断面 (東から) .....	12	Fig. 45 第2区下面全景 (西から) .....	20
Fig. 22 SU-11完掘状況 (東から) .....	12	Fig. 46 第2区上面・下面造構全体図(1/250) 東壁・西壁土層断面図(1/125) .....	折込み
Fig. 23 SB-04 (1/60) .....	13	Fig. 47 SD-21 (北西から) .....	21
Fig. 24 SB-04 (東から) .....	14	Fig. 48 SD-21出土遺物 (1/4) .....	21
Fig. 25 SB-04人物対比 (東から) .....	14	Fig. 49 包含層上層遺物出土状況 (北西から) .....	22
Fig. 26 SP-05柱痕跡 (東から) .....	14	Fig. 50 上層遺物出土状況近景 (北西から) .....	22
Fig. 27 SP-05柱痕跡断面 (東から) .....	14	Fig. 51 第2区上層出土遺物 (1/4) .....	23
Fig. 28 SP-03柱痕跡 (北から) .....	14	Fig. 52 第2区西壁土層断面 (東から) .....	24
Fig. 29 SP-03柱痕跡削 (北から) .....	14	Fig. 53 第2区東壁土層断面 (西から) .....	24
Fig. 30 SK-05 (南東から) .....	15	Fig. 54 SK-25 (1/60) .....	24
Fig. 31 SK-05 (1/40) .....	15	Fig. 55 SK-26 (1/60) .....	24
Fig. 32 SK-07 (1/40) .....	15	Fig. 56 SK-25 (西から) .....	25
Fig. 33 SK-07土層断面 (北西から) .....	15	Fig. 57 SK-26 (西から) .....	25
Fig. 34 第1区造構出土遺物 (1/4・1/2) .....	16	Fig. 58 SK-25・26出土遺物 (1/4) .....	25
Fig. 35 SR-10 (1/40) .....	17	Fig. 59 包含層下層遺物出土状況 (北から) .....	25
Fig. 36 SR-10検出状況 (西から) .....	18	Fig. 60 第2区下層出土遺物-1 (1/6・1/4) .....	27
Fig. 37 SR-10完掘状況 (西から) .....	18	Fig. 61 第2区下層出土遺物-2 (1/6) .....	28
Fig. 38 ST-13調査前状況 (南から) .....	18	Fig. 62 第2区下層出土遺物-3 (1/2・1/1) .....	29
Fig. 39 ST-13検出状況 (南から) .....	18	Fig. 63 第2区下層出土遺物-4 .....	30
Fig. 40 ST-13 (1/30) .....	18	Fig. 64 第2区西谷部出土遺物 (1/4) .....	31
Fig. 41 ST-13下壺 .....	18	Fig. 65 第2区出土鉄器 (1/3) .....	31
Fig. 42 ST-13上壺・下壺 (1/6) .....	19		

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

今回の調査は都市整備局公園建設課から福岡市博多区大字東平尾地内・東平尾総合運動公園内の整備計画の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課になされた事により始まる。受付番号は4-1-143である。

埋蔵文化財課では事業地内に大谷遺跡・大谷古墳が含まれる事、また昭和50(1975)年の公園建設にともなう調査から既に11次を数えるまでの調査が実施され、弥生時代の大型建物や銅鐸鑄型が出土する等遺跡が密集する地域である事が周知されており、事業地内約30,000m<sup>2</sup>の試掘調査を行う必要があると判断、平成3(1991)年6月19~7月5日・11月25日~翌年3月31日にかけ、14箇所の試掘を実施した。その結果、第11トレンチで古墳を1基・第13トレンチで弥生・古墳時代の住居址と鉄斧・弥生土器・土師器を検出する包含層の存在を確認した。協議の結果、文化財保護法57条3項に則って本課が記録保存のため緊急発掘調査を行う事となった。調査は平成4年5月11日~同年8月9日まで実施された。

調査番号	9210	遺跡略号	OTN-4
調査地地籍	博多区大字東平尾	分布地図番号	9-A-3・B-3
開発面積	30,000m <sup>2</sup>	調査実施面積	1,437m <sup>2</sup>
調査期間	920511~920809	事前審査番号	4-1-143

### 2. 調査の組織

調査委託：福岡市都市整備局公園建設課

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉（当時）

調査統括：埋蔵文化財課長 折尾学 埋蔵文化財課第2係長 塩屋勝利（当時）

調査庶務：埋蔵文化財課第1係 守崎幸男

調査担当：埋蔵文化財課第2係 加藤良彦（当時）

調査協力：関徳光 関義郎 古原勝 上方高弘 佐久間箱子 関照子 安川菊代 安川初枝  
松村京子 上田貴子 阿比留ユエカ 木村厚子

資料整理：半川敬治（九州大学） 木村厚子 能美須賀子 国武真理子 畠田慧

## II. 調査区の立地と環境

調査地点は福岡市の都心部より東へ7 km、博多湾岸より南東へ6 kmの地点、福岡空港の東側約400 mの位置にあり、東側に多々良川流域の柏原平野・西側に那珂川・御笠川流域の福岡平野とに分かつ、三郡山地より派生した大城山（標高410 m）の山麓・南東から北西へ延びる新世代第3紀層からなる月隈丘陵の北端部に近く、標高29~49 mの小支丘尾根上（調査区第1区）と、これの南西斜面（調査区第2区）に位置する（Fig. 3）。

丘陵上には縄文時代の石器・石匙等が散見されるが、本格的に生活遺構が出現するのは弥生時代前期後半からで、影ヶ浦遺跡・中・寺尾遺跡・宝満尾遺跡で袋状堅穴が検出される。古墳時代まではこれら丘陵北西部を中心に生活遺構が広がっている。前期末から中期にかけては尾根線上に壇場・土塙墓群が形成され、金隈遺跡・金隈上屋敷遺跡・下月隈B遺跡・天神森遺跡・上月隈遺跡・席田青木遺跡等で検出される。

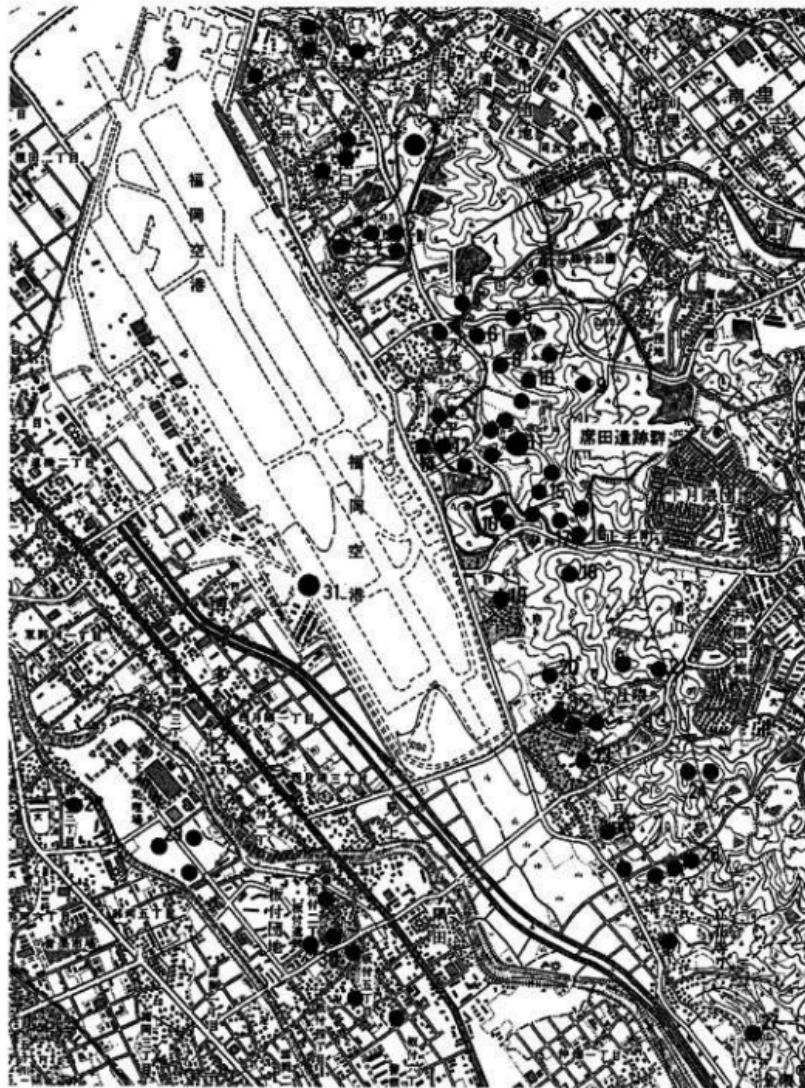
弥生時代中期中頃から古墳時代にかけては席田遺跡群を中心とする堅穴住居址群が北ノ浦遺跡・中尾遺跡・久保園遺跡・当大谷遺跡・赤池ノ浦遺跡と丘陵中部の立花寺遺跡で検出されている。また宝満尾遺跡では後期の土塙墓から漢式鏡が、久保園遺跡では中期後半の5×8間の大型掘立柱建物が、赤池ノ浦遺跡では横帯文銅鑄錫型と2×1間の掘立柱建物数棟、大谷遺跡の1~3次調査で後期の青銅製鋤先と漢式鏡片・鉄斧等11点の鉄器を検出している。

古墳時代以降、月隈丘陵での活動の中心は中・南部に移行し、堤ヶ浦古墳群・持田ヶ浦古墳群等数十から百数十基を越す大規模な群集墳の形成が始まる。これに対し北西部では北ノ浦・席田・天神森古墳群等、小支丘の尾根線上に1~3基程の小規模な古墳群が形成され、堅穴系横口式石室を有する古墳が目立つ。

奈良・平安時代でも中部の古墳時代以来の立花寺遺跡で多数の掘立柱建物群と樹列、越州空青磁・刑州窓白磁・綠釉陶器・瓦類が多数検出されており、中心地として不動の様相を示している。

月隈丘陵の西側には那珂川・御笠川流域の福岡平野が広がり、御笠川左岸には初期の二重環濠農耕集落であり細形銅劍・銅鉢を副葬した壺棺墓群の板付遺跡、さらに北西側には細形銅劍を副葬した壺棺墓群と古墳時代後期~終末期の大規模倉庫群の比恵遺跡群、縄文晩期の最古の二重環濠と中期後半の大規模倉庫群の那珂遺跡群、さらに南には須玖岡本・須玖永田等の春日丘陵の遺跡群と、奴国を中心とした中心地が広がっている。御笠川右岸では近年空港内で晚期の溝と多数の木器・弥生後期の環濠と大型掘立柱建物を検出した佐原遺跡がある。

板付遺跡から那珂・比恵・春日丘陵上の遺跡群と、多数の武器形祭器の鉄型が検出されており、席田遺跡群もこれら青銅器製作の中心地の一角をなしている。



- |             |              |            |
|-------------|--------------|------------|
| 1 下口井堀拉墓遺跡  | 2 席田青木遺跡群    | 3 席田北ノ浦1号墳 |
| 4 席田北ノ浦2号墳  | 5 席田堤ノ上遺跡    | 6 席田中尾遺跡   |
| 7 席田新立表1号墳  | 8 席田貝花尾1号墳   | 9 席田新立表2号墳 |
| 10 席田貝花尾2号墳 | 11 席田大谷遺跡    | 12 席田久保隈遺跡 |
| 13 席田赤穂ノ浦遺跡 | 14 席田林崎遺跡    | 15 席田丸尾古墳群 |
| 16 宝満尾遺跡    | 17 宝満尾東遺跡    | 18 上ノ池古墳群  |
| 19 雀居古墳     | 20 下月隈大神森森遺跡 | 21 下月隈古墳群  |
| 22 下月隈宮ノ後遺跡 | 23 上月隈東柏原墓道跡 | 24 上月隈古墳群  |
| 25 文殊谷古墳群   | 26 谷須古墳群     | 27 金隈遺跡    |
| 28 那珂深ヲサ遺跡  | 29 那珂久平遺跡    | 30 板付遺跡    |
| 31 雀居遺跡     |              |            |

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



Fig. 2 调查区位置图 (1/6000)

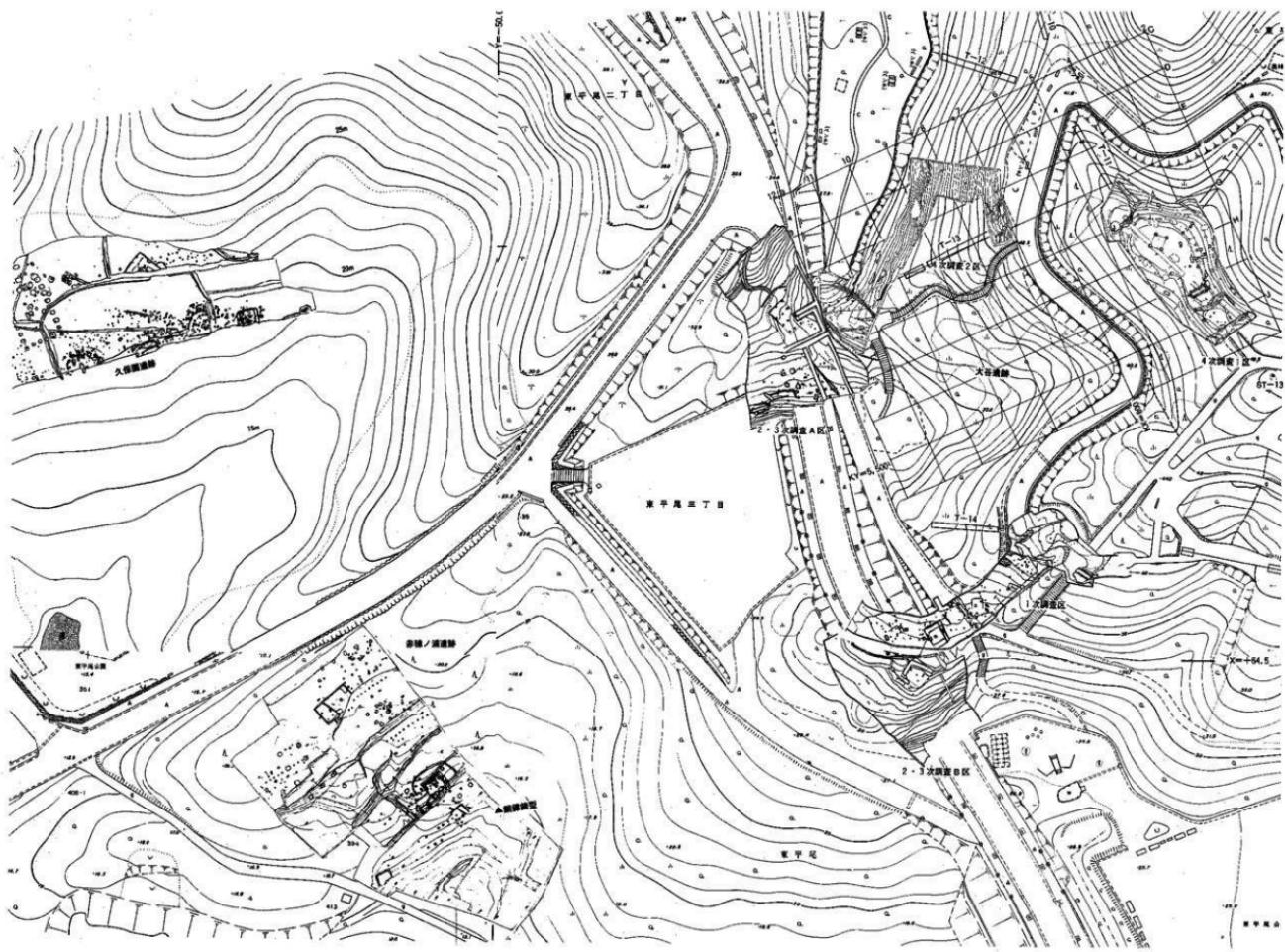


Fig. 3 周辺調査区地図 (1/1000)

### III. 調査の記録



Fig. 4 第1区全景（南東から）



Fig. 5 第1区全景（北西から）



Fig. 6 第1区遠景（北東から）

#### 1. 調査の概要

調査の対象地は丸尾山から北西に舌状に延び、球技場を間にさみ込む比高20~30m程のふたつの小丘で、14ヶ所の試掘の結果、大谷遺跡に含まれる南側小丘の丘陵尾根部分（約700m<sup>2</sup> - 第1区）と丘陵西側斜面（約743m<sup>2</sup> - 第2区）の二箇所で調査を行う事とした。

調査の結果、1区で弥生時代中期中頃の貯蔵穴2基・中期末後期初頭の壺棺墓1基・後期の物見台的な1×1間の大型掘立柱建物1棟とこれを取り囲む溝5条・石蓋土壙墓1基・土壙3基、古墳時代後期の竪穴系横口式石室古墳1基を検出した。

2区では弥生時代後期の溝1条・土壙2基・地山整形部1箇所・自然流路2条・柱穴多数、古墳時代の溝2条・土壙3基・地山整形部1箇所と柱穴を検出した。

検出した遺物は1区で各遺構から弥生時代中期中頃~後期後半の弥生土器・石包丁・古墳から鉄鎌1点を検出、2区で北西谷部の包含層を中心に弥生中期前半~後期後半の土器・鉄鎌・鉄斧等鐵器6点・石錘・石包丁と石製銅戈鋌型模造品を検出、赤穂ノ浦遺跡の銅鐸鋌型片つぐ麻田遺跡群の青銅器製作を示す資料として注目される。

遺物は総量でコンテナ17箱である。

## 2. 1区の調査

1区は北西に伸びた標高48.5mの小丘の先端部に位置する。

尾根線上は1975年来の公園造成工事で平坦に削平・整地されており、大谷1号墳は地表に痕跡をまったく残していない状況であった。

南東側は幅2.5～5m程の狭いやせ尾根がつづき、逆に先端部で11×15mの平坦部が若干西側に角度をふって広がっており、この中央部に尾根線に沿ったかたちで1×1間の大型掘立柱建物が検出され、南東の最狭部を幅3.0m・深さ70cm程の溝SD-02が尾根を直交方向に切断し、反対側の丘陵先端斜面にもこの建物を区画する様に尾根と直交してL字形に屈曲する溝SD-09が掘削されている。遺物の時期は弥生時代中期後半～後期後半を示す。

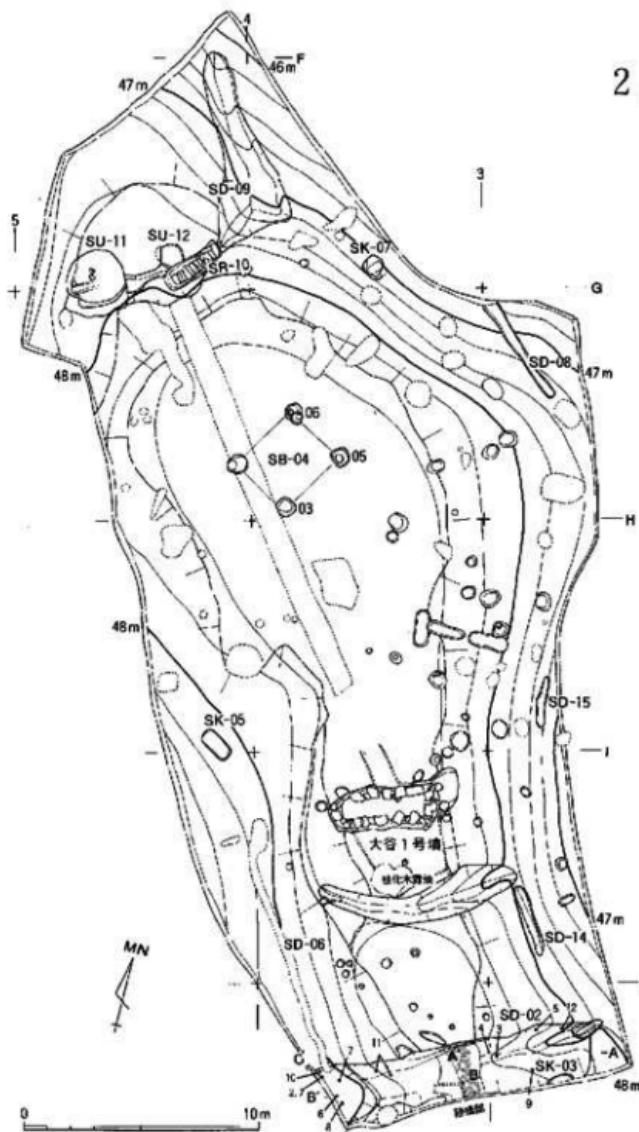


Fig. 7 第1区遺構全体図 (1/250)



Fig. 8 1号墳全景（北西から）



Fig. 9 1号墳石室（北東から）



Fig. 10 1号墳石室（南西から）

#### (1). 大谷1号墳 (Fig. 8~12)

丘陵先端の占地に良好な平坦部をさけ、これから15m程南東の狭い尾根上に築造されている。

石室部分は公園建設時に重機によつて蹂躪され腰石が残るのみで、これもほとんどが内側に倒され踏みならされており、原位置を保つものは前壁と右側壁手前の三石のみで相方の内面側辺を接して角を形成している。高さは低く20cm前後。石室の内法は $3.5 \times 1.1$ m程の狹長なもので主軸をN-63°-Eにとり尾根と直交方向の北東に開口する。床面には10cm以下の小振りな角砾を敷いているが盜掘によりほとんどが動いている。

掘方は $2.4 \times 1.0$ mを測り、腰石部分を溝状にさらに掘り下げている。墓道はこれに連なって若干北に角度をふつて50cm程伸びている。石室床面より5cm程低く掘削され、横口部の両外側に側壁様の塊石を一個ずつ置く。土層断面に黒褐色のバンドがあり、最低一度の追葬がなされた様である。

封土はまったく残存せず、石室中心から4.5m程東側に尾根と直交する弧状の溝があり周溝と思われる。北西側5m程の丘陵のくびれも埴丘造成の痕跡の可能性がある。

遺物は石室内から曲刃の鐵鎌が一点のみ。 $21.3 \times 2.8$ cmで基部から先端にかけ2~4mmと厚くなる。基部から3cmまでは刃を研ぎ出していない。

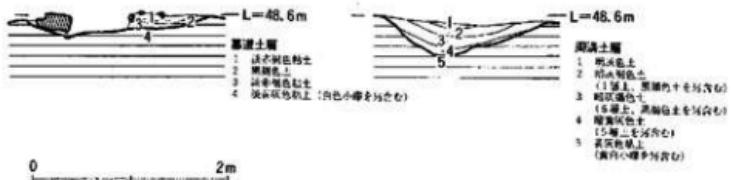
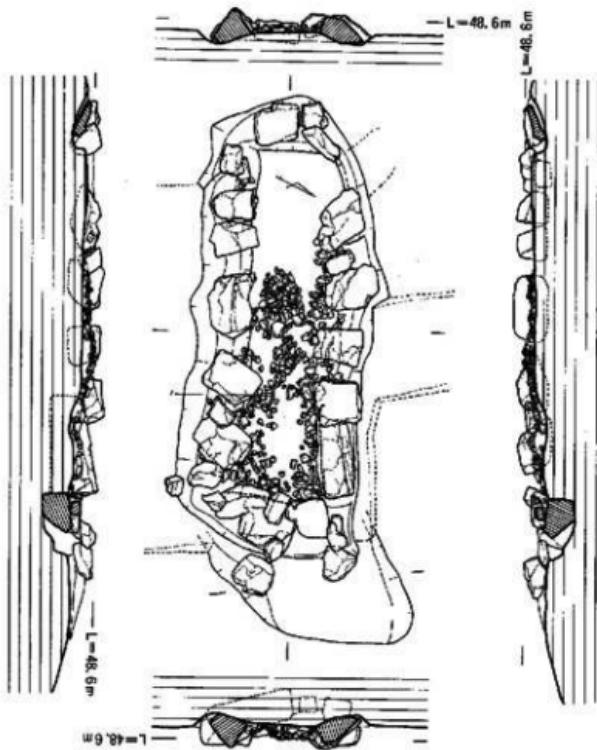


Fig. 11 1号填石室·土层断面图 (1/60)

(2). 溝

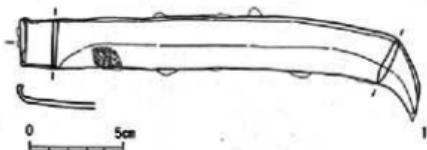


Fig. 12 1号墳出土鉄鏟 (1/3)



Fig. 13 SD-02全景 (北西から)

溝は5条検出され、掘立柱建物SB-04を取り囲む様に配されている。時期を明確にできる遺物が出土したのは02のみで他は弥生土器の小片のみである。

SD-02 (Fig. 13~19)

1区南東端部で検出され、調査区内で最も狭い尾根部分を直交方向に切断している。幅は約3m、深さは尾根線部で約40cm・最深部で80cmを測る。

検出時に尾根部分の陸橋に気づかず南北2条の別個の溝と誤認し、最後の段階でこれと気づいたため陸橋の検出に失敗している。土層は下から暗褐色土・地山流土の黄褐色土・黒褐色土・さらに黄白色の地山客土となっており、最下層の暗褐色土の堆積後尾根部分に、底面幅2.5m・上面幅1.6m・

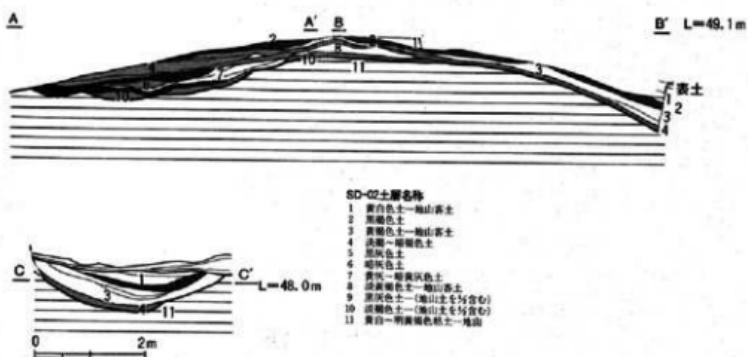


Fig. 14 SD-02土層図 (1/100)



Fig. 15 SD-02 (北東から)



Fig. 16 SD-02東側縦断土層 (北から)



Fig. 17 SD-02櫛模印土層表面 (北西から)

残存高30cm程淡黄褐色の地山粘土の客土がなされ墳構となっている。

遺物は大部分が下位からの出土である (Fig. 19)。地山が第3紀層で炭層をはさんで酸度が高いためか席田遺跡群内の土器の残存状況は極めて劣悪で、検出時に覆土とともにほとんどの土器の器表がはげ落ちてしまい、土器本体も軽く握るだけでつぶれる程軟化している。

遺物は全て弥生土器である。2は壺の口縁、もしくは器台の脚端部であろう。径45~50cmの大形品である。3は径9.5cm程の小形壺。赤褐色を呈するが同器種で黒褐色を呈しケンマがなされるものがある。4は蓋で径10cm。つまみ部が輪状に外反する。5は丹塗の壺胴部で複合突帯を2条施す。6~11は壺で、6は口径37cm。口縁部はく字形に若干丸味を負びて外反する。端部は丸く仕上げる。7は口径34cm。口縁は外湾気味にく字形に外反し、内面端部が突出する。8も同様で内面端部の突出が著しい。9・10は幅広で薄底の底部で胴部と厚みが大差ない。11は同



Fig. 18 脚付鉢-12

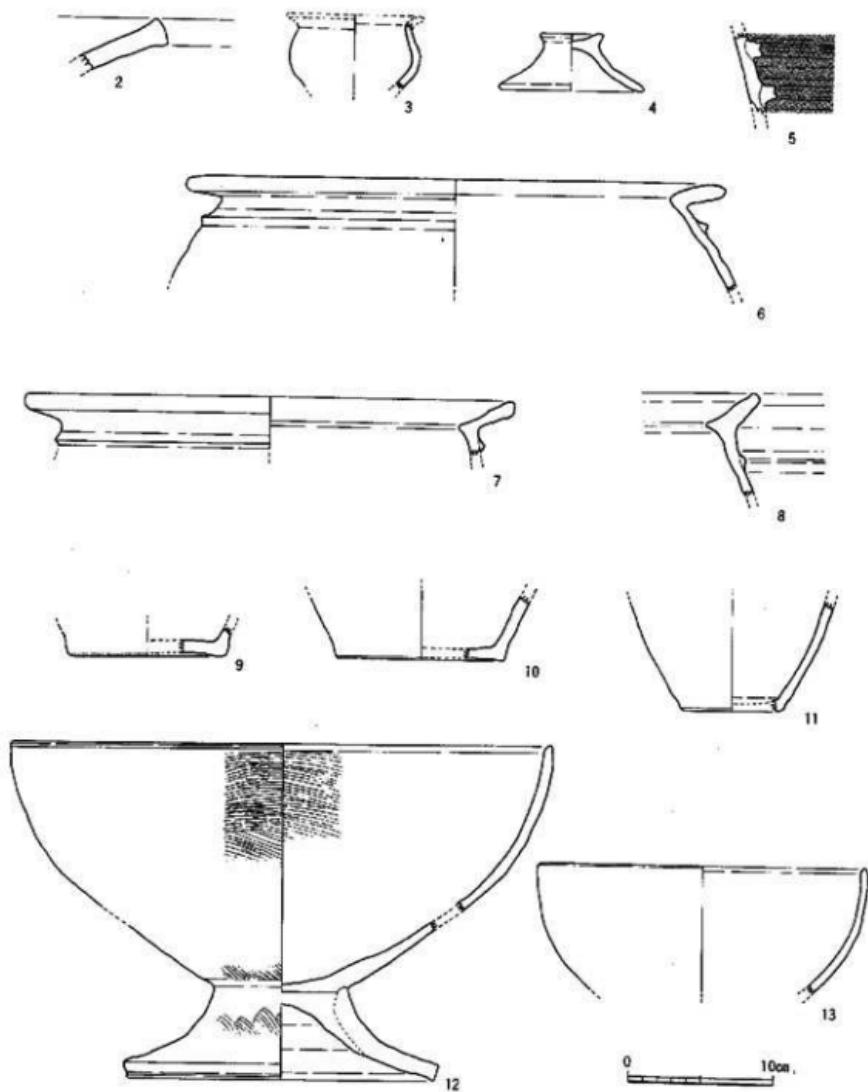


Fig. 19 SD-02出土遺物 (1/4)

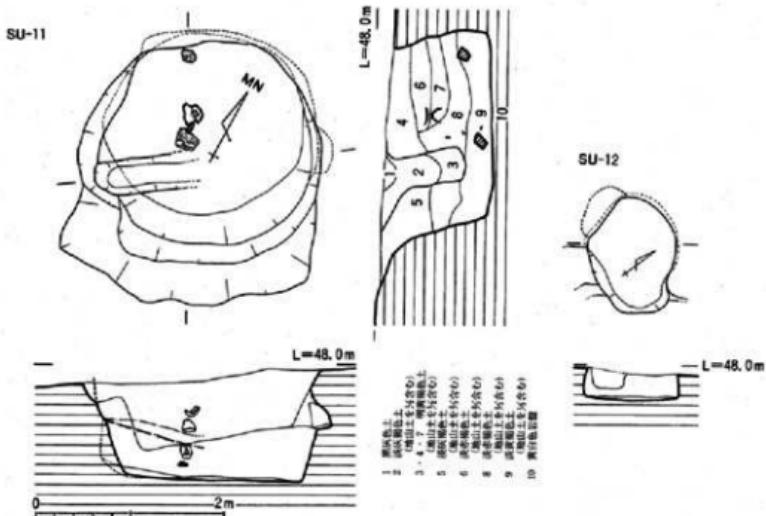


Fig. 20 SU-11・12 (1/60)

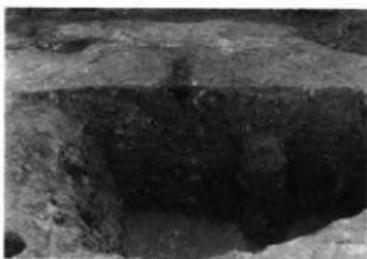


Fig. 21 SU-11 土層断面 (東から)



Fig. 22 SU-11 完整状況 (東から)

様に薄い底部であるが丸底氣味となる。底脇が若干くびれて胴が外湾氣味に立ち上がる。12は大型の台付鉢で、溝底付近で倒置・破碎された状態で検出された。口径37cm・器高23cm台径21cmを測り、胴上半はヨコの粗いハケ、以下は同様のナナメハケ調整を施す。台端部内面は跳ね上がり氣味につまみ出されている。体部の器壁は薄く、台部は2~3倍の厚みがある。13は12に類似したこれより一回り小さな鉢で口径22.7cmを測る。器壁も同様に薄く、口縁は直立する。

### (3). 貯藏穴

貯藏穴は丘陵先端の尾根線緩斜面に2基並設している。溝SD-09と石蓋土壙墓SR-10に切られる。

#### SU-11 (Fig. 20~22)

径2.6~2.9mの円形プランで深さ1.2mを測る。黄白色の軟質の岩盤に掘削されたもので底面は平坦に仕上げられている。遺物は人為的に埋められた埋土中から床面より浮いた状態で検出される。建立後、再度東西方向の溝状に長さ2.6・幅0.4・深さ0.85mの掘削がなされ、両端の壁を抉り込んでいる。埋没は自然堆積でレンズ状に堆積し最上位は黒灰色土である。

遺物は (Fig. 34) 14が直口II線の鉢で口径18.1cm・器高10cm。底部は薄い平底である。15~17は壺で15・16はL字口縁をなし内無端部が若干突出する。18~20は壺の底部と思われる頸部が大きく外反する。19は底径が7cmと小さく底が厚い。21は淡灰褐色の安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石包丁の半折品で刃部に多数の刃こぼれが身受けられ敲打に用いられている。

SU-12はSU-11の東側4mに位置し石蓋土壙墓に切られる。口径1.0m底径1.1mの不整

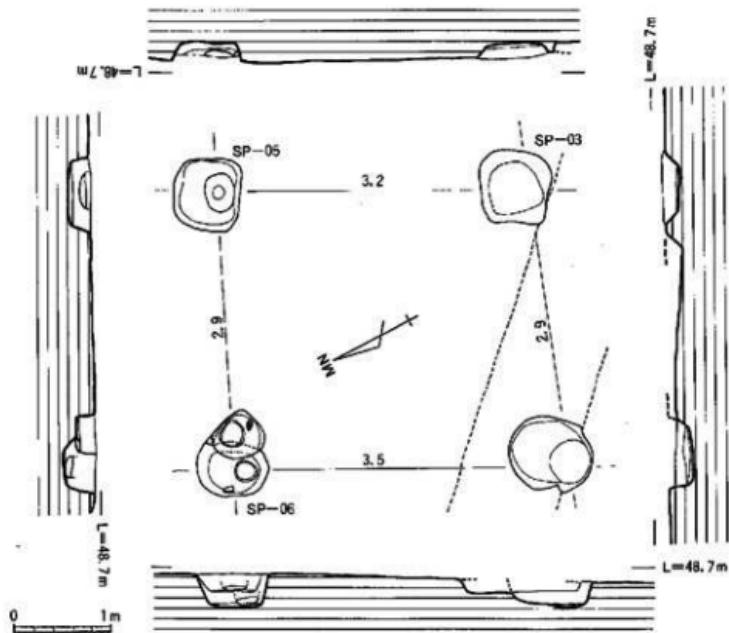


Fig. 23 SB-04 (1/60)



Fig. 24 SB-04 (東から)



Fig. 25 SB-04人物対比 (東から)

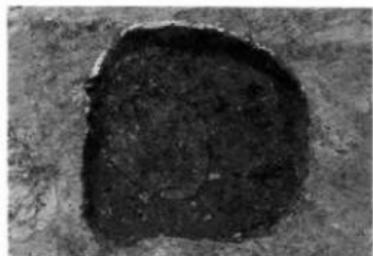


Fig. 26 SP-05柱痕跡 (東から)



Fig. 27 SP-05柱痕跡断面 (東から)



Fig. 28 SP-03柱痕跡 (北から)



Fig. 29 SP-03柱痕跡断面 (北から)

円形で断面はフラスコ状を呈する。床面は同様に平坦で同じく人為的に埋め立てられている。

#### (4). 据立柱建物

柱穴は径20~50cm前後のものが東側に突出した緩斜面を中心に検出されるが建物としてまとまるものはSB-04のみである。内部からはいずれも弥生土器が検出される。

##### SB-04 (Fig. 23~29)

溝によって囲まれた丘陵先端の平坦部中央に位置し、主軸は尾根線に平行し N - 66° - W



Fig. 30 SK-05 (南東から)

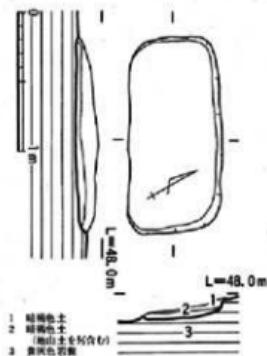


Fig. 31 SK-05 (1/40)

にとる。掘方は南側の SP-03・05が径70cm程の隅丸方形で北側は径70~90cmの円形プランである。大きく削平されているため深さは浅く15~35cmを測るのみであるが元来は70~90cm程の深さであったと推測される。柱痕跡は径20~30cmの円形で柱の間隔からするとずいぶん小振りである。柱間は東西方向が長く3.2~3.5m、南北が2.9mを測る。

遺物は弥生土器の小片が数点検出されているが、固化にかろうじて耐えられるものは1点のみである (Fig. 34)。22は径50cm前後の壺の口縁部と思われ、ゆるく外反し内面はケンマがなされる。

#### (5). 土壙

土壙は3基検出された。

SK-05 (Fig. 30・31) は丘陵くびれ部の西側斜面で検出され、等高線と平行に主軸をとり N-63°-W を測る。長さ1.4m幅68cmの隅丸方形プランで、深さ8cmと極めて浅い。斜面に位置するため大きな削平は受けておらず、元来浅い土壙であったと思われる。遺物の検出はない。

SK-07 (Fig. 32・33) は SB-04の北側11m程の斜面に位置する。中央部と北東端部を樹根によって搅乱されているが、長さ100cm幅80cmの隅丸方形プランで、丘陵尾根側で深さ40cmを測る。土壙断面は尾根側から谷側へと傾斜する自然堆積で床面には厚さ8cm程炭粒と灰層が堆積する。よっ

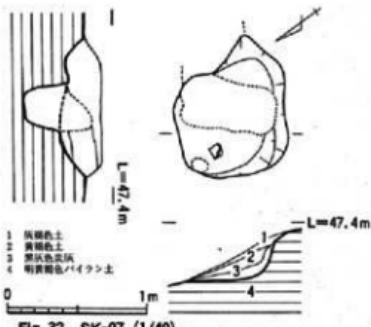


Fig. 32 SK-07 (1/40)

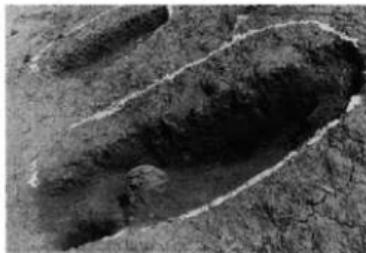


Fig. 33 SK-07土壙断面 (北西から)

て上縁は谷側が開いたコ字状の掘削であったと思われる。周壁には明瞭な焼成痕は見受けられない。

遺物は(Fig. 34) 数片の土器片と23の夜刀式高坏の坏部を検出している。23はゆるく湾曲する肩部から口縁部が稜をなして強く外反する。外面は器壁が剥離しているが内面にはヨコ方向のケンマ痕が残る。肩部径で20cmを測る。色調は淡褐色を呈する。

SK-03は調査区南端でSD-02に切られる(Fig. 7)。径90cm程の円形で深さ30cm程の断面プラスコ形を呈し、SU-12に似る。灰白の地山粘土で埋められており、弥生土器片10数片を検出している。

#### (6). 石蓋土壤墓 SR-10 (Fig. 35~37)

丘陵先端部の緩斜面に位置し、SU-12を切りSD-09に切られる。尾根線と直交方向にもうけられ主軸をN-36°-Eにとる。長さ3.6m幅1.3m深さ25cm程の狭長な掘方の中に長さ2.42m幅46-35cm深さ40cmの墓壙を灰白色の岩盤を掘削してもうけている。東側が幅広く円形

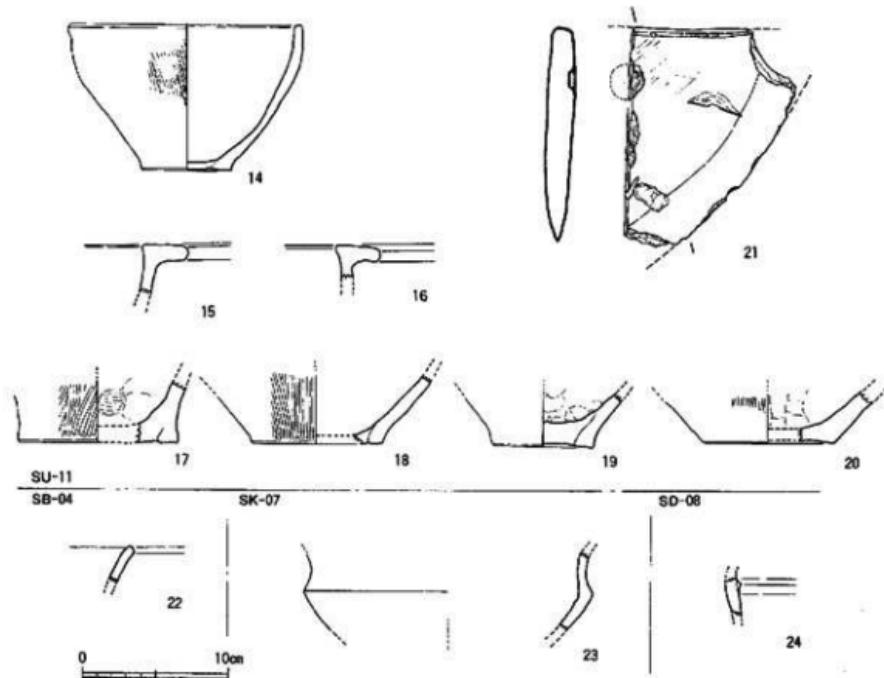


Fig. 34 第1区遺構出土遺物 (1/4・1/2)

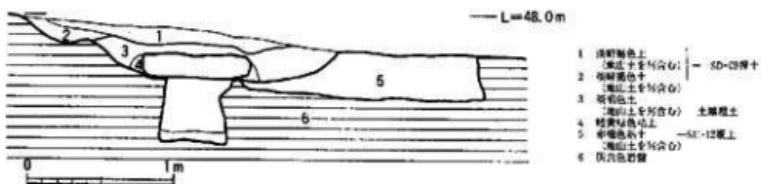
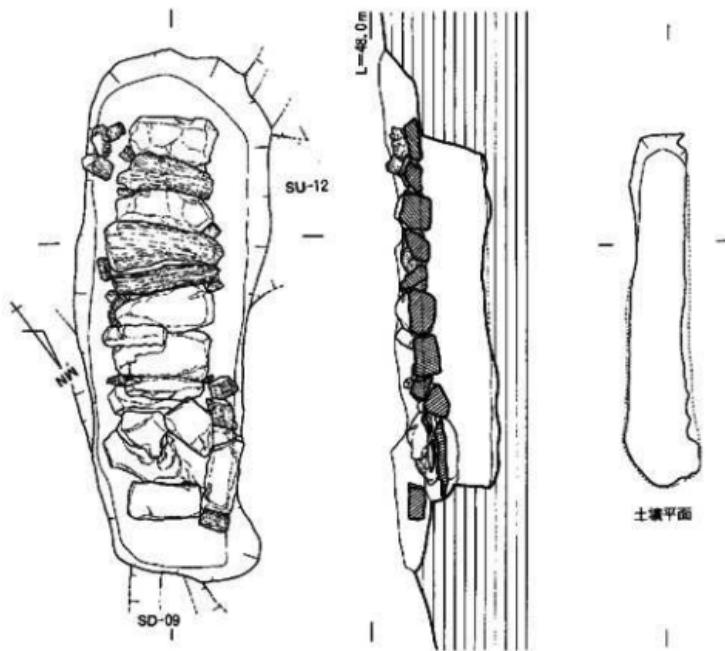


Fig. 35 SR-10 (1/40)

に整形されており頭位側と思われる。断面は底面が8cm程広い台形の箱形に丁寧に整形されている。内部には黄褐色粘土が流れ込んで5~8cm程堆積している。遺物・人骨とともに検出されなかった。

蓋石は石材の確保に苦慮した様で長さ60~70cm幅15~50cm程の細長い花崗岩・頁岩の円錐・



Fig. 36 SR-10検出状況（西から）

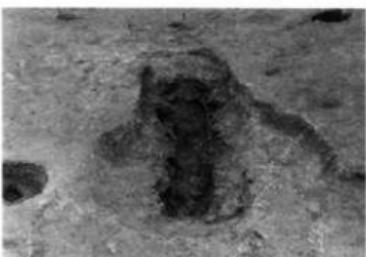


Fig. 37 SR-10完掘状況（西から）

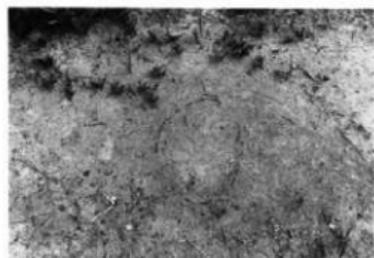


Fig. 38 ST-13調査前状況（南から）

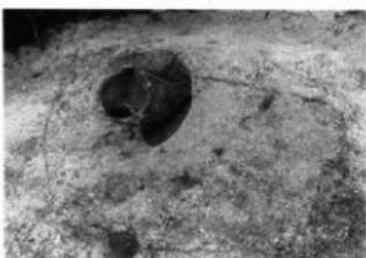


Fig. 39 ST-13検出状況（南から）

桂化木を11個連ねて上面を覆っている。蓋石と墓壙との空隙には暗黄緑色粘土で目貼りがなされている。SD-09の掘削時に頭位の蓋石が露出した様で蓋石の一部が移動している。

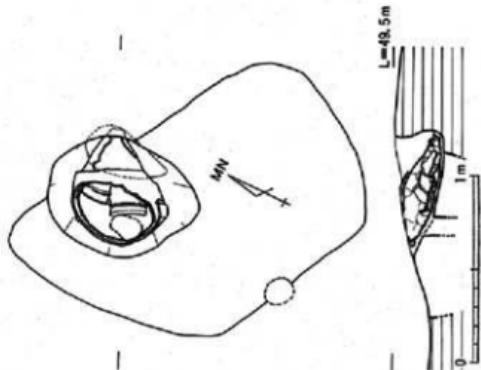


Fig. 40 ST-13 (1/30)



Fig. 41 ST-13下部

(7). 壱棺墓 ST-13

ST-13は支丘基部の尾根線上に位置する。

今回の調査対象範囲からはずれているが、公園建設時に上半部が削平され地表に露出しており、通路の一部となって崩壊するがままとなっていた (Fig. 38)。よって崩壊する前に記録する事とした。

遺構検出を行ったところ、小児用の壹棺とこれに切られる長さ1.85m幅1.1mの墓壙を確認した。成人棺の墓壙と思われるがこれ以上の破壊の心配は無いため小児棺のみの調査を行なった。径80×65cmの円形で底部側を5cm程抉り込んだ墓壙内に器高61cm口径44cmの下壹(26)に胴部上半を打ち欠いた径53cm程の上壹(27)を呑口式に被せ斜位に安置している。上半部はほとんどが削平され土圧によって潰れた状態

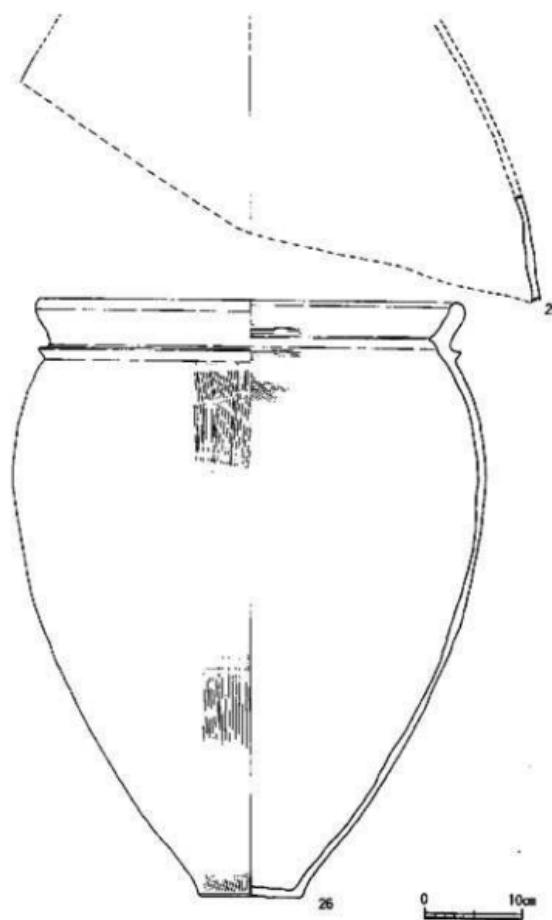


Fig. 42 ST-13上壹・下壹 (1/6)

で検出された (Fig. 39・40)。内部には遺物・人骨ともに残っていなかった。

下壹26は外湾しながら字に外反する厚い口縁で端部は丸く仕上げる。内面端部が突出する。胴径が口径より大きく最大径は上位にある。底部は平底で薄い。上壹25は検出時は下壹を覆って全周が確認されたが風化の度合が著しく遺構実測図と破片から復元した。



Fig. 43 第2区上面全景(西から)



Fig. 44 第2区上面全景(南から)



Fig. 45 第2区下面全景(西から)

### 3. 2区の調査

2区は1区の立地する小支丘と西側の天王山との間の北に開く谷の東斜面と赤穂ノ浦遺跡が立地する南西に開く谷の谷頭部に位置し、2・3次のA調査区に接している(Fig. 3)。

現況は一部が山林と遊歩道となっており、西向きの標高40~30mの急斜面部と30~28mの緩斜面にわたっている(Fig. 46)。

E~F-8グリッドの急斜面では2条の自然流路が確認され、中期後半~末の土器滲りを3箇所検出した。

E~G-11・12グリッドの緩斜面部では50cm程の流土下に灰褐色の包含層があり、灰褐色土中からは須恵器が若干検出され古墳時代後期の堆積と思われる。黒褐色土中からは弥生時代後期の土器が検出され(包含層上層)、この下面で遺構の検出を行なっている(上面)。北に開く谷斜面には以下に黄灰~暗灰色土の包含層があり(包含層下層)この下面でも遺構検出を行なっている(下面)。

上面では溝3条・土壙4基・土器滲り1箇所と南西側の谷斜面で地山整形部を1箇所と柱穴、下面では溝1条と土壙4基・土器滲りと柱穴多数、上面同様南西谷斜面で地山整形部を1箇所確認した。

上・下層では弥生後期後半までの遺物が下限であり、時期差は明瞭でないが量は下層が多量である。

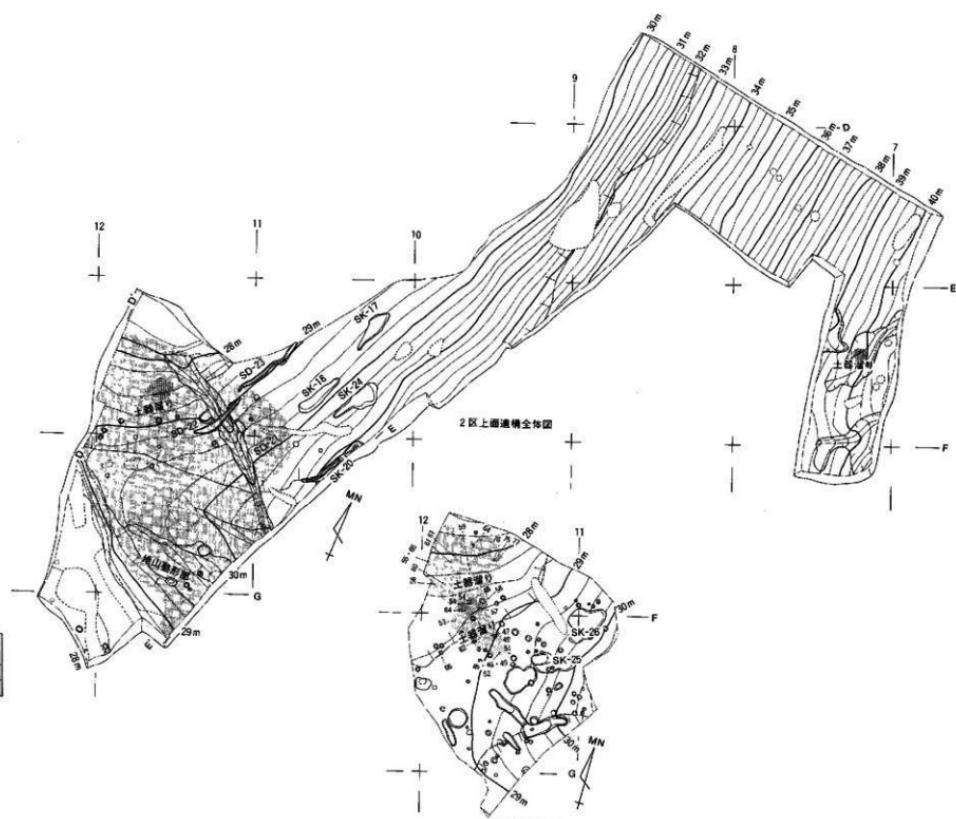
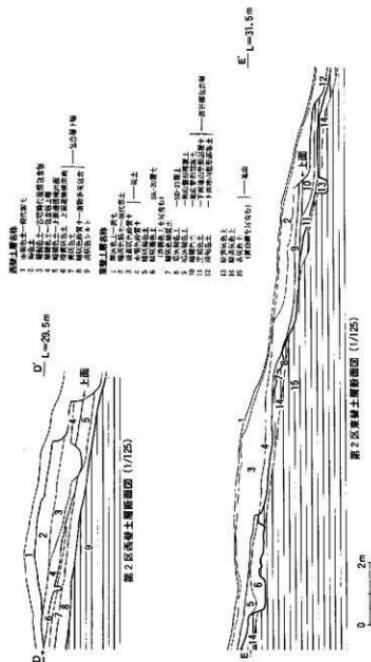


Fig. 46 第2区上面・下面堆积全体图 (1/250) 東壁・西壁土层断面图 (1/125)

### (1). 上面の調査

上面では等高線に平行する地山整形状の土壌3基(SK-17・18・24)と壁溝状の溝を有し、竪穴住居の可能性も考えられるSK-20、溝2条(SD-22・23)と等高線に直交する溝1条(SD-21)、包含層中で土器割り1箇所、南西谷に面する地山整形部を1箇所と柱穴を検出している。包含層・各遺構の遺物は弥生中期後半～後期後半を主体とするが包含層上のSD-21からは須恵器が若干検出されており、上面の遺構は古墳時代が主体を占めると思われる。

溝 溝は3条検出している。SD-22・23は等高線に平行し、幅30～50cm程で幅は狭くSD-22はSD-21を切っている。

SD-21 (Fig. 47) E-F-12グリッドに位置し等高線と直交方向に延びる。幅65～140cm深さ10～50cmの断面U字形で上方から下方に向かう倍程度に広がる。土層断面では暗灰褐色の古墳時代包含層が上位に堆積する。

出土遺物 (Fig. 48) 須恵器の高杯・壺の小片を検出している。27・28は壺で27はT字状の口縁で上面は丸く厚目に整形される。28は厚目の底部で上げ底気味に仕上がる。外面はケンマ。29-31は壺で、29はL字形の口縁で上面は湾曲気味に端部が下がる。30はT字口縁の成人棺の破片で内面の突出が大きい。他に包含層からも成人棺の破片を数点検出しており、丘陵上の壺棺墓群の存在を示唆している。31は丸底気味の底部で径7cmを測る。



Fig. 47 SD-21 (北西から)

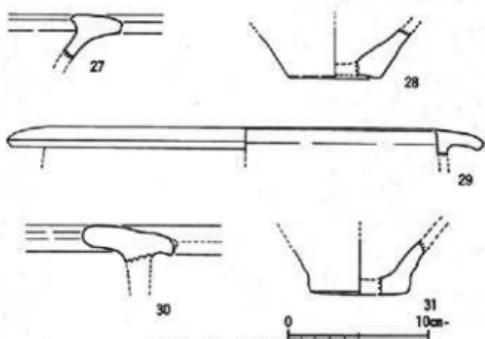


Fig. 48 SD-21出土遺物 (1/4)

土壤 土壤は4基確認しており、SK-20以外は長さ3～4m幅0.7～1m程の不整形で狭長なもので谷側の壁はない。内部も周囲にも柱穴・溝は認められず竪穴住居の可能性は低い。SK-20はF-10グリッドの壁際で下端部が検出され大部分は調査区外に広がっている (Fig. 46)。長さ3m深さ50cm程の逆台形の断



Fig. 49 包含層上層遺物出土状況（北西から）



Fig. 50 上層遺物出土状況近景（北西から）

おり、遺物は弥生中期前半～後期後半の土器が出土するがE-12グリッドで殊に顕著である(Fig. 49・50)。この傾向は下面でも認められる。

**出土遺物 (Fig. 51)** 32・33は成人壺棺の口縁部で、32は口縁が外傾するT字をなし、内側端部が強く張り出す。33は厚目の若干外傾するL字口縁で内側端部が若干突出する。34～36・38～40は壺で、34は薄い平底、36・38は丸底気味で36は底部脇のくびれがゆるく胴部が開く。38は丸底の度合はゆるく、底部脇はくびれて胴部は直立気味にたちあがる。35は若干外傾するL字口縁で内側端部が若干突出する。径24cm。39は口縁が外湾気味に内傾するく字口縁で端部は丸くおさめる。内側端部は突堤状に強く突出する。口径45cmを測る。40は直線的に内傾するく字口縁で、胴部が口縁径より大きく張り出す。口縁内側端部は突出気味となる。37は丸底気味の壺の底部で底部脇のくびれはなくなり外湾気味となり、胴部が大きく張り出す。径7cm。他に小型の鋸先口縁壺・大型の跳ね上がり状口縁の広口壺・蓋等がある。

面でSD-21同様暗灰褐色土が上位に堆積する。幅15cm程の小溝が壁に沿っておりSD-21同様古墳時代で住居址の可能性が考えられる。

**地山整形部** 南西に聞く谷の南向き斜面にもうけられ、幅3m深さ30cmで、南半部は下面の地山整形部の黒褐色覆土(包含層上層)上に20cm程の客土をなして平坦面を広げている(Fig. 46)。覆土の暗灰褐色土中からは弥生土器の小片のみ検出されたが、弥生後期の包含層上に造成がなされており古墳時代に属する可能性が高い。

この南向き斜面は2・3次調査A区に連なるもので同区とB区・第1次調査区と、支丘の南向き斜面に生活遺構が営なまれている事が確認されており(Fig. 3)、本調査区の東側にさらに生活遺構が広がるものと思われる。

**上層土器溜り** 黒褐色土の包含層上層は北側・南西側相方の谷斜面に広がっているが北側で顕著で15cm程堆積して

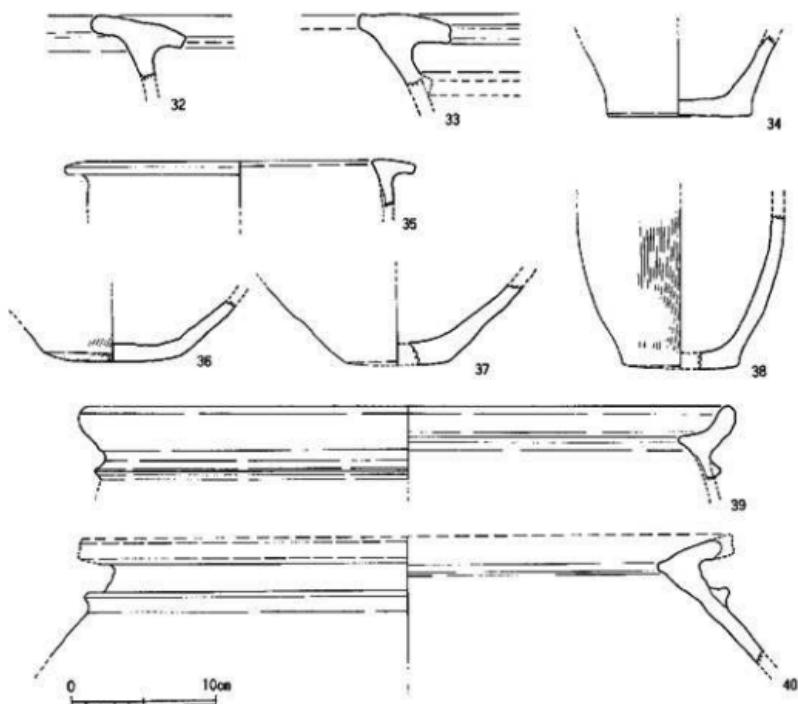


Fig. 51 第2区上層出土遺物 (1/4)

## (2). 下面の調査

上面の黒褐色包含層下に上層と同様、北側谷の谷頭部斜面と南西谷の南向き斜面のE～F～12グリッドに黄灰色～暗灰色砂質土が堆積する（包含層下層）。斜面上位の調査区東端にはほとんどなく、斜面下位の西端側で厚さ30cm程と厚く堆積する。遺構検出はこれらの下面の暗黃灰色土・淡灰色シルト上で行なった（Fig. 46）。

検出した遺構は不整形の上層4基と、南西谷の南向き斜面でし字状の溝1条・地山整形部1箇所と柱穴多数を検出した。また上層同様に北側谷斜面で包含層が厚く堆積しており、殊に暗灰色砂質土中から多量の土器と丹塗磨研の祭祠土器・石製銅戈鋌型模造品等の石器・鐵鎌等5点の鐵器を検出しており祭祠色が強く伺がわれる遺物が多い。

これら遺構・包含層から検出される遺物は全て弥生時代で、中期末～後期後半が主体となる。

**土壤 (Fig. 54～57)** 遺物を検出する土壤はSK-25・26の2基のみである。



Fig. 52 第2区西壁土層断面（東から）

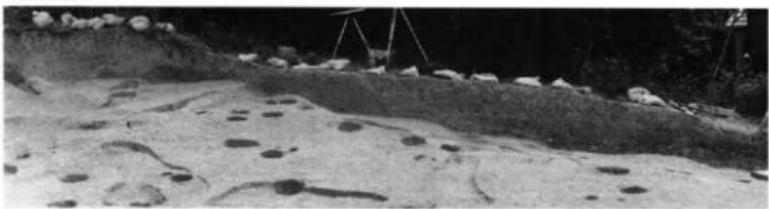


Fig. 53 第2区東壁土層断面（西から）

SK-25は等高線と直交方向に位置する不整形の溝状のもので長径2.8m短径1.3mを測る。上・下2段の造りとなっており、上段は浅く10cm程、下段は20cmを測る。下端の北西部の床面上で壺の底部を検出している。出土遺物は（Fig. 58）、41が壺の口縁部でやや厚目の短いく字口縁をなし、端部は丸くおさめる。42は壺の底部で薄い平底を呈し、径8cmを測る。内面に炭

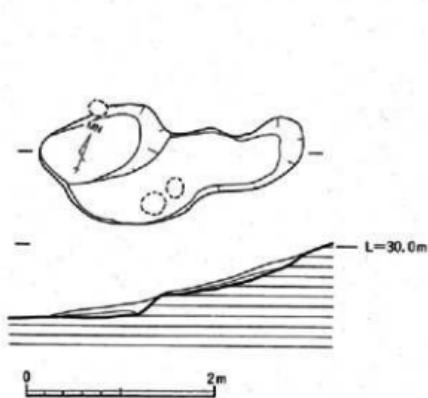


Fig. 54 SK-25 (1/60)

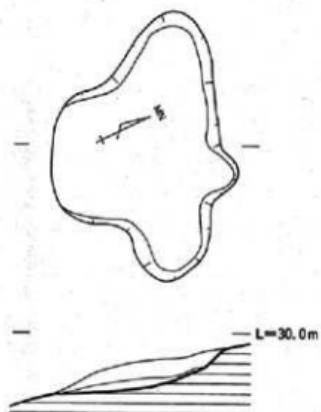


Fig. 55 SK-26 (1/60)



Fig. 56 SK-25 (西から)



Fig. 57 SK-26 (西から)

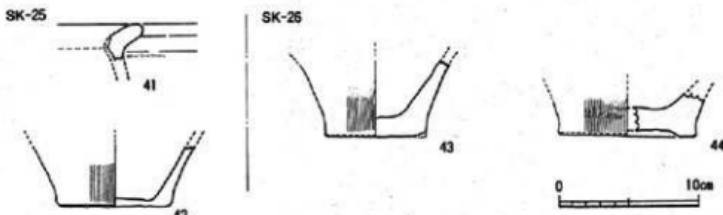


Fig. 58 SK-25・26出土遺物 (1/4)

化物が付着する。

SK-26はSK-25と同様に谷を分ける尾根線上に立地している。不整形の土壤で長径2.9m短径2mを測る。断面は船底状で深さ30cmを測る。遺物は43・44とも甕の底部で、43は平底、小さめの厚い底部で径7.2cm。44は上げ底となる厚目の底部で径10cm。ともに胴部が外反して開く古い様相を示す。



Fig. 59 包含層下層遺物出土状況 (北から)

#### 溝

溝は南西谷の地形変換線に沿って2.5m程延び西に直角に折れて尾根を横断する。遺物の検出はない。

**地山整形** 上面の整形部の南側・斜面下位で検出され、幅2.5m深さ25cmを測る。南端の斜面側に幅30cm客土により造成した部分が残っている(12層)。

**下層土器層** 包含層は上層と同様の広がりを見せ、北側谷部で顕著である。

上半の暗黄灰色・黄灰色上は谷を分かつ尾根線部で厚く、斜面下位では消滅している。遺物の大部分は下半の暗灰色砂質土に集中し、上層の土器層りと重複し、これが更に広がった状態で検出された。

ドットを落とすと、斜面上位で中期末の丹塗磨研土器（Fig. 60）が集中する部分と、斜面下位で丸底気味底部の土器群（Fig. 61）が集中する部分とのふたつのグループに大別でき、石製銅戈鋤型模品と鉄器類は後者のグループに属している。

**出土遺物（Fig. 60～65）** 45～53は上記の斜面上位を中心に散布する丹塗磨研の祭祠土器である。45は瓢形の壺で復元口径19.5・器高28cmの寸のつまつた小形で肩部のくびれはゆるい。46も瓢形の壺で丹塗はなされていない。復元口径25・器高38cmで肩部のくびれが著しく腹最大径は下位にある。47は丹塗りのL字口縁の壺。48は小形無頭壺で口縁に一对の焼成前の穿孔がある。49は中形の筒形器台で復元口径17.5cm・器高52cm、脚部外面に5条の多条突帯を施す。50は大型の筒形器台の口縁部で鉢径28.6cmと鉢が広がらない。51は高杯の脚部と思われる断面四角形の珍品で上端で径3cmを測る。52は鋤先口縁の高杯、53は薄い上げ底気味の壺の底部である。

54は径37cmの倒卵形の胴部に強く外反する径24cmの口縁の壺で口縁下端が強く下方に垂下する。口唇は器壁が削離しており施文等は不明。内面はゆるい跳ね上げ状に整形される。底部は丸底気味で脇が若干くびれる。55は胴中位に径50cmの最大径をもつ胴部に底部と口縁部が強くしまる大形の壺で、II線は広口で内側端部を跳ね上げ状に仕上げる。口径38.4cm・器高61.7cm。56は径30.6cmの球形の胴に径12.6cmの短い口縁がつく壺である。器高28.8cm。57は中期の所産の片口付の鉢で13cmの広い底部が目立ち上げ底気味となる。58は口径21.8cm・器高9.4cmのく字II線の鉢。59も中期の所産で口径11.7cm・器高18.3cmの器台で器壁が薄い。60は大振りの器台で頸部が上位で強くしまり口縁上端が突出し複合口縁状をなす。径18cm・器高24cmを測る。61はII径32.5cmの壺で口唇は凹線気味に内面上面は跳ね上げ状に仕上げる。62は中期前半のL字口縁の壺で上面は水平。端部が若干外傾する。口径29.6cm。63はII径40.8cmのL字口縁の壺で端部が若干外傾し脇が張る。口縁内端が突出気味となる。

64は軟質の凝灰質砂岩製の銅戈鋤型模品である。1区内部の斜面に砂岩の露頭があり、5～10cm程の方柱状に節理しており、この転写を用いて太目の線刻で鋤型面を表現している。上半と裏面・左側面を欠くが、残存長8.2cm幅は基部で7.5cm上端部で6.8cmと狭くなる。厚さは残存で4.1cm。

表面は厚さ2～3mm程の風化部分を削り落とし概略整えて銅戈の鋤型を抜の輪郭と内を削り込む以外すべて線刻の広狭で表現を試みている。背は一本の太い線で表わし、桶も外側を線刻して表わしている。桶と胡の接線から上7mmの位置に横の線刻で穿を表現している。胡は広形銅戈の鋤型と同様に両側まで抜けている。中軸からの左援幅は2.9cm、右援幅は3.6cmと中軸は大きく左に片寄っている。

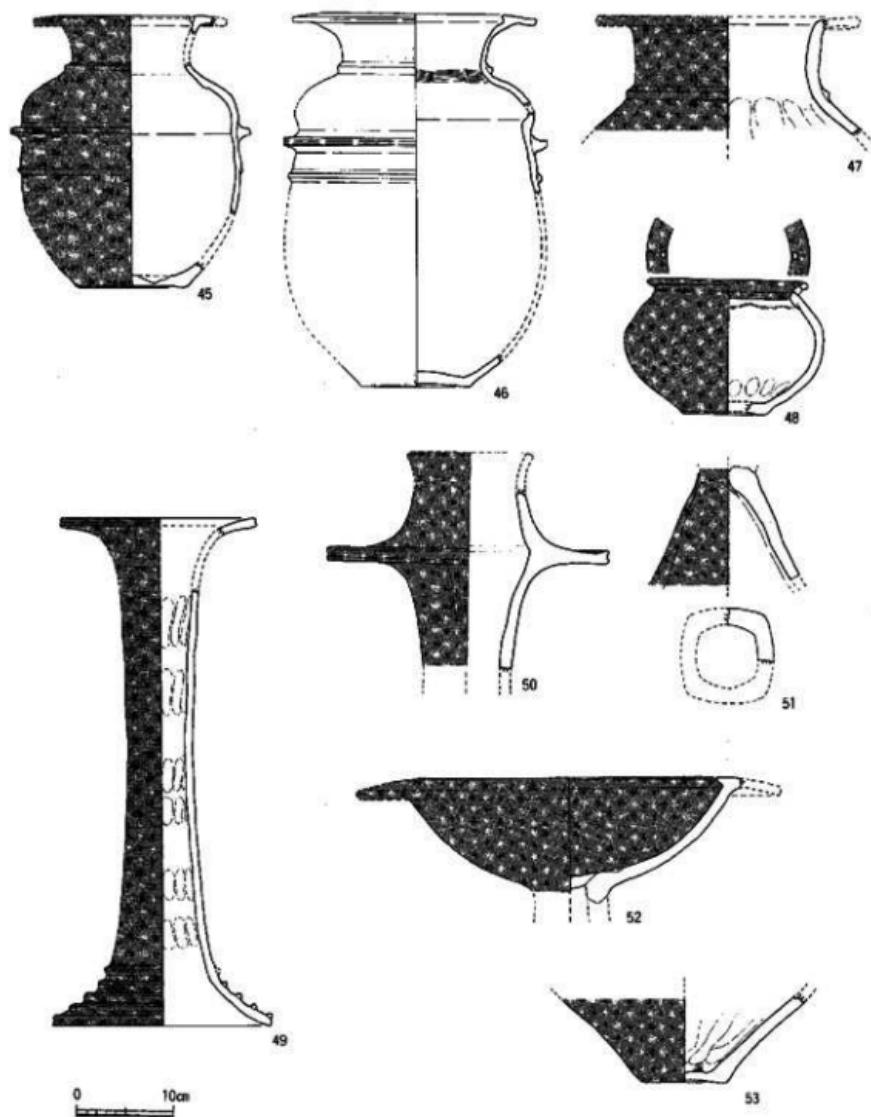


Fig. 60 第2区下層出土遺物一 (1/6・1/4)

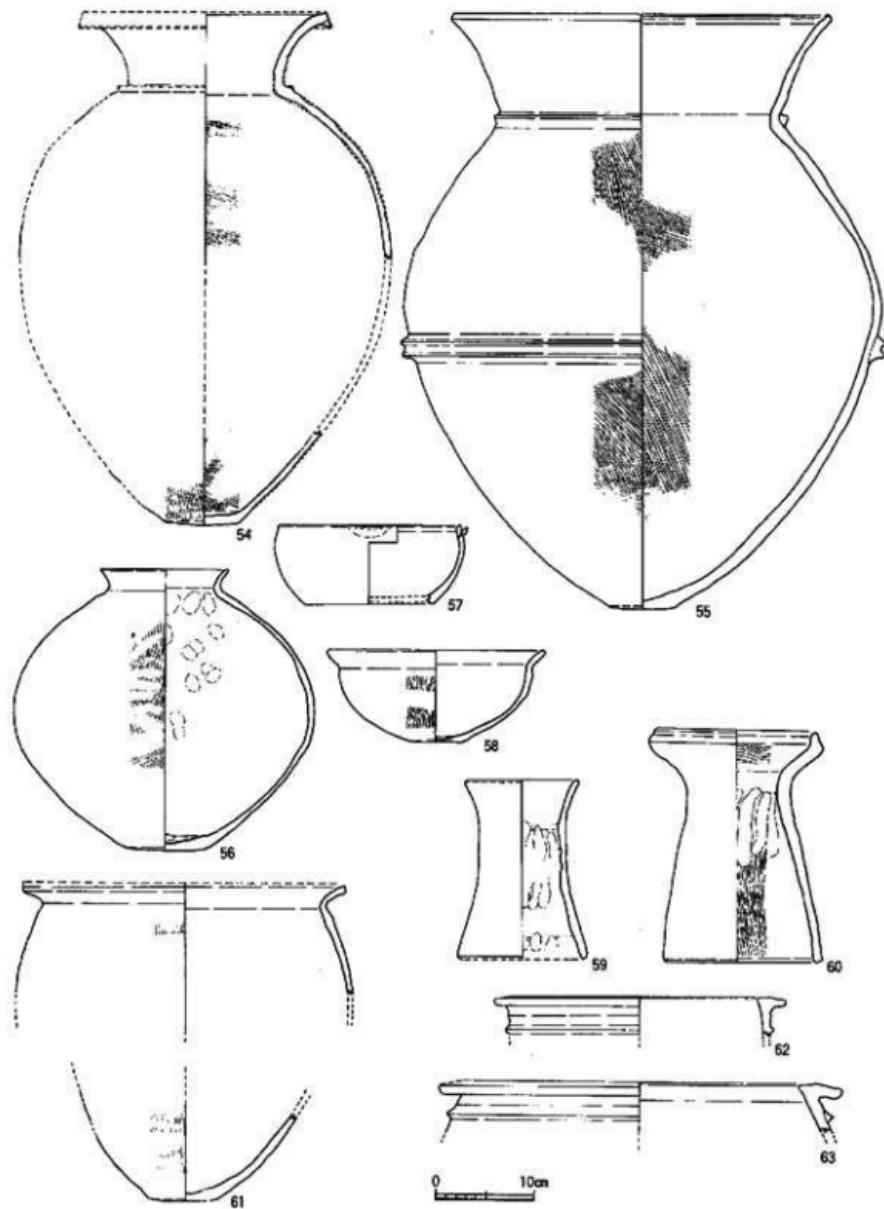


Fig. 61 第2区下層出土遺物—2 (1/6)

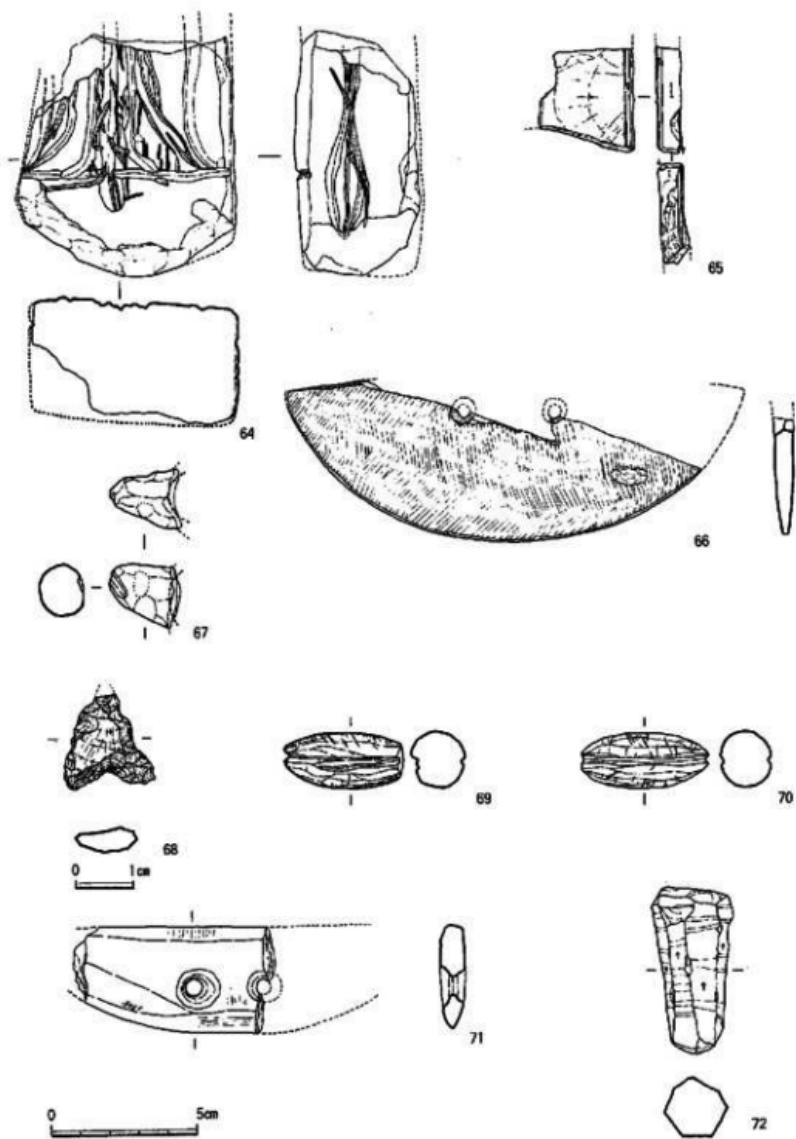


Fig. 62 第2区下層出土遺物—3 (1/2・1/1)

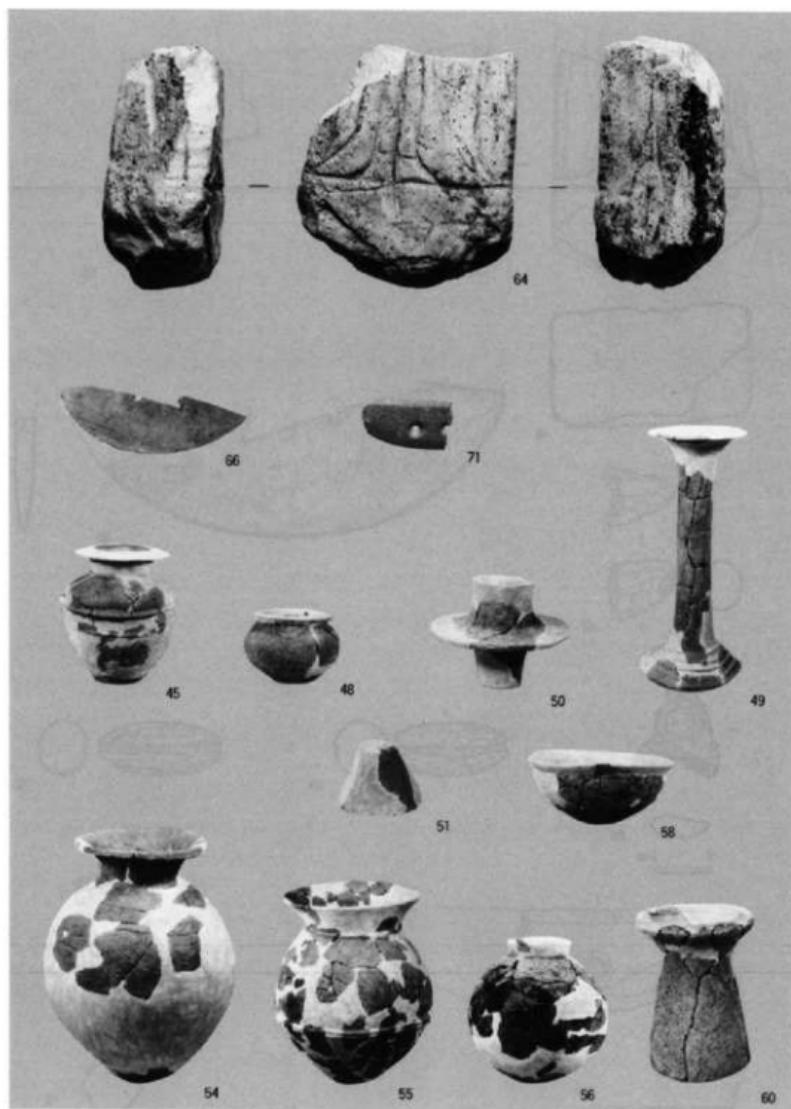


Fig. 63 第2区下層出土遺物—4

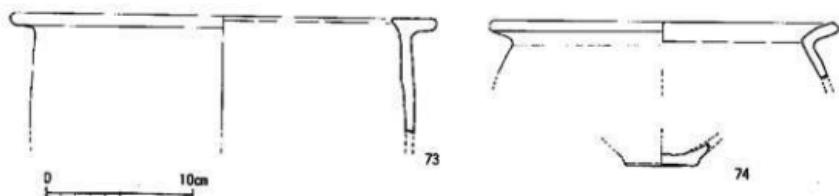


Fig. 64 第2区西谷部出土遺物 (1/4)

左右の柄と接の間には数条の接状の線刻が残されており、フリーハンドでの試行の結果と思われる。線刻の断面は鋭く、金属性器を用いて作成されている。右側面は表皮を残したままで中軸線と2本の曲線で鐵を表現している様で、左側面に中軸線のみが残っており同様の線刻がなされたと思われる。65は緑灰色の凝灰色砂岩の石器素材で上面左側縁・下縁・正面右側縁に幅・深さ1.5~2mm幅の溝を擦りここにタガネ状のものを当てがって幅8mm程の偏平な素材を割り取っている。3.7×3.2×0.8cmを測る。66は荒砥段階の石包丁で刀はない。灰白色。71は完成品の欠損で紫褐色で断面は黒灰色。67は上製杓の柄、68は黒耀石製の剥片鑿、69・70は滑石製有漂石鍤でそれぞれ22・21kgを測る。72は淡灰色砂岩を角柱状に鉄器で整形している。75~78は下層出土の鐵器で、他に刀子が1点出土している。75~77は鉄鎌で75は16.7×4.3×0.5cm 138gを測る。76・77は折り重なって出土しており同個体の可能性が高い。78・79は袋状鉄斧で47・430gを測る。79は13トレンチからの出土。

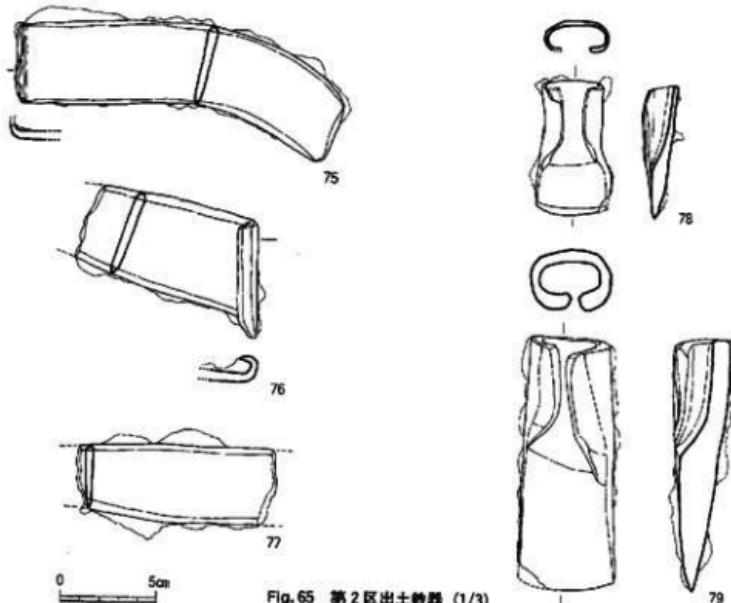


Fig. 65 第2区出土鉄器 (1/3)

## IV. 小 結

今回の調査では縄文晩期～古墳時代後期にわたる遺物、遺構を検出したが、中心は弥生時代中期後半～後期後半の時期である。

1区の比高差30mの丘陵先端部では陳橋を伴う丘尾切断の溝SD-02と、これによる区画の中央部に1×1間(2.9×3.2m)の大型の掘立柱建物SB-04・炭粒と灰の詰まる土壙SK-07が検出されており、物見台としての性格が伺われる。SK-07から夜臼式の高坏の小片が検出され、周壁に明晰な焼成板が見受けられない等不安材料が有るが状況的には物見台と一組の烽火台としての可能性を捨てがたい。SB-04からは弥生土器の小片のみしか検出されず時期比定が難かしいが、SD-02と同時期とすると中期末～後期後半に比定される。住居址は1次～3次調査区・2区の丘陵南側緩斜面に広がっており、これら居住区と別個に区画され、把木町西ノ追跡跡・小郡市一ノ口遺跡のあり方と違なる。

2区の包含層中から検出された石製銅戈鋒型模造品は後期中頃～後半の丸底気味の平底を呈する土器を中心とする土器群よりの中から大型鉄鎌・袋状鉄斧・刀子と、5点の鉄器とともに検出されている。小さな転轍にフリーハンドの線刻で表現されたものであり、どこまで正確に特徴を表出しているか判断が難かしく、中広銅戈か広形銅戈かの判別はつけがたい。鋒型を模したものとしては、鋒型か模造品かで意見が分かれている様であるが、兵庫県三田市平方遺跡出土の土製銅鋒鋒型を鋒型模造品とすると、本例で2例目である。

以上のように、席田遺跡群内において、久保園遺跡の5×8間の大型掘立柱建物・赤穂ノ浦遺跡の銅鋒鋒型・本遺跡の銅戈鋒型模造品と17点もの多量の鉄器の出土・居住区と別個に区画された物見台等、銅製祭器作製にかかる特定集団としての様相が伺がえる。

大谷古墳は竪穴系横口式石室を有する古墳で、封土が全く残っていないが石室の中心と南側に残った周溝の中心から復元すると径約9mの円墳となる。石室は3.5×1.1mの狭長な竪穴系横口式で、羨道部の側壁はなく、かわりに塊石を一個ずつ置いている。天神森古墳1号墳・席田遺跡群内の貝花尾1号墳・丸尾1号墳・当古墳と、月隈丘陵の北西部に同系の古墳が目立って分布しており、石室の形態は貝花尾1号墳・丸尾1号墳に近い。また古墳の分布も北西部では1～3基程の小規模な古墳群が尾根線上に散漫に分布するのに対し、中・南部の堤ヶ浦・持田ヶ浦古墳群等では數十～百数十基と大規模なものが多く対象的なあり方を示している。遺物は石室内の大形曲刃鉄鎌一点のみで時期比定に心もとないが、天神森2号墳で同類の鉄鎌が検出されており5世紀後半に比定されている。また石室の形態分類では柳沢…男氏のⅢB期B2型にあたり、5世紀第4四半期～6世紀第2四半期に比定されている。

---

## 席田遺跡群 7

福岡市埋蔵文化財調査報告書第357集

1994年（平成6年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会  
〒810 福岡市中央区天神一丁目8-1  
(092)711-4667

印 刷 ダイヤモンド印刷株式会社

---

